



Title	精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験
Author(s)	鳶田, 愛理沙; 蔭山, 正子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2020, 26(1), p. 40-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73831
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験

Experiences of Women with Parents Suffered from Mental Disorders Becoming Mothers

畠田愛理沙¹⁾・蔭山正子²⁾

Arisa Shimada¹⁾, Masako Kageyama²⁾

要 旨

精神障がいを抱えた親に育てられた女性の中には、自身が母親になることへの不安や困難を抱える人がいる。本研究は、精神障がいを抱えた親をもつ女性が、母親になる経験を明らかにすることを目的とした。精神障がいを抱えた親をもつ女性で、自身も子育てを経験した4名に個別インタビューを行い、質的記述的に分析した。その結果、女性は、【結婚・出産に対する不安や怖さ】を抱いていたが、安定した人や家族との出会いがあり、【結婚・出産の決意に至る】。【子育てをする上での困難】があるも【自分の力で子育てに対処】した。やがて【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】した女性は、【子育てを通した癒しと成長】を経験し、【母を理解そして感謝】の思いを抱いていた。育児困難を軽減するためには、夫・婚家・ママ友の存在や積極的な支援が重要であり、結婚や育児への不安を解消するためには、結婚前の早い時期に同じ子どもの立場の人と体験を共有することが、有効だと考えられた。

キーワード：精神障がい、子ども、経験、育児

Keywords : mental disorder, child, experience, parenting

I. 緒言

国内の精神疾患の患者数は近年増加し、2014年には392万人を超えている¹⁾。それに伴い精神障がいを抱えた親をもつ子どもの数も増加していると予想される。欧米では15-23%の子どもが、精神疾患を患う親と暮らしていると推定されている²⁾。国内の障がい者を対象とした調査では、65歳未満の精神障害者保健福祉手帳所持者の15.5%が、子どもと同居していると報告されている³⁾。

これまで精神障がいを抱えた親と子どもに関する国内の研究は、親の精神障がい子どもに与える否定的な影響に着目しており^{4,5)}、子どもの経験には着目してこなかった。しかし、最近になって精神障がいの親をもつ子どもの全般的な経験を記述する論文⁶⁾や書籍⁷⁾が公表され始め、支援が行き届かない状況下で、困難を抱えて生活している子どもの経験が明らかにされてきている。精神障がいの親をもつ子どもは、「自分の家が普通ではない」と認識すると報告されている⁸⁾。子どもの立場である成人女性の体験談には、健全な家庭で育ったという感覚が持てないために、成人しても自分が

親になることに不安があると書かれている⁹⁾。しかしながら、精神障がいを抱えた親に育てられた女性が母親となった経験については、研究報告がほとんどない。精神障がいを抱えた親に育てられた女性が、母親となった経験を明らかにすることができれば、これから母親となるであろう女性の不安を軽減したり、対処を検討することが可能になると期待できる。

そこで、本研究は、精神障がいを抱えた親をもつ女性が、母親になる経験を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究協力者

精神障がいを抱えた親と暮らして育ち、自身も子育てを経験した女性を研究協力者とした。

過去の辛い経験を話すことが予想されるため、すでに体験を十分に共有している人として、精神疾患の親をもつ子どもの会2か所の中心メンバーに依頼した。2か所の運営メンバーでもある第二著者より、該当する中心メンバー4名全員に研究を案内し、全員から協力を得た。

1) 大阪府立病院機構大阪精神医療センター、2) 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

1) Osaka Psychiatric Medical Center, Osaka Prefectural Hospital Organization

2) Osaka University Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences

2. 調査方法

個別インタビューを2018年7-8月に実施した。インタビュー時間は平均84 (SD=4.3) 分だった。インタビューガイドを用いた半構造化面接とし、「結婚や育児に対する不安」「育児をすることにに対する思い」「育児中の生活や気持ち」「育児を経験したことでの変化」「助けとなった関わり」を質問した。面接内容は了解を得て録音した。

3. 分析方法

質的記述的に分析した^{10,11)}。音声から逐語録を作成し、文脈のまとまりごとに区切り、精神障がいを抱えた親をもつ女性が、母親になる経験とはどのようなものかという視点でコードを作成した。意味内容の類似性や関連性を考慮し、時系列を意識しながらサブカテゴリー、さらに抽象度をあげてカテゴリーを生成した。また、事例とサブカテゴリー・カテゴリーのマトリックスを作成し、比較を行いながら、サブカテゴリー・カテゴリーを検討した。研究の妥当性を確保するために、分析結果を研究協力者に確認してもらうメンバーチェックを行い、全員から納得できると回答を得た。

4. 倫理的配慮

大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会 (No. 16283-2、2017年4月24日) の承認を得て実施した。研究の目的と概要、自由意思による参加などを文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 研究協力者の概要

研究協力者4名 (A氏～D氏) は、母親が統合失調症、もしくは妄想性障害を自身が幼少期の頃に発病しており、母親の病状は安定しておらず、子ども時代に不適切な養育環境にあったと全員が認識していた。調査当時、研究協力者は小学生から成人までの子どもを持っており、全員が小学生以上の子育て経験をもっていた。3名は自身も精神的に調子を崩した経験があり、10代後半の結婚前 (B氏) や子が小学生の頃 (C氏) に一時的に精神的に不安定となったり、子が2歳の頃に一時的に心療内科に通院していた (A氏)。

2. 精神障がいを抱えた親をもつ女性が、母親になる経験

カテゴリーを表1に示す。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〔 〕、語りを「 」で示す。

精神障がいを抱えた親に育てられて成人した女性は、【結婚・出産に対する不安や怖さ】を感じていた。しかし、安定した人や家族との出会いがあり、【結婚・出産の決意に至る】。【子育てをする上での困難】があるも、【自分の力で子育てに対処】した。やがて、【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】した女性は、【子育てを通した癒しと成長】を経験し、【母を理解そして感謝】の思いを抱いていた。

1) 【結婚・出産に対する不安や怖さ】

精神障がいを抱えた親に育てられた女性は、【結婚・出産に対する不安や怖さ】を感じ、結婚や出産を躊躇した。

女性は、自分が育った家庭を「ごちゃごちゃした家庭」(B氏) などと表現し、家庭に「いいイメージが持てない」(A氏) まま成長していた。そのため、「普通の家庭を知らないまま家庭をもつことの不安」を抱き、結婚に戸惑いを感じた。

出産を機に発病した母親に育てられた女性は、「おかしい母親を見てきたので、そういう人になりたくない」(D氏) と思うと同時に、「自分もそうなるのではという、根拠のない恐れ」(D氏) を感じていた。また、病状が悪化した母親が自分に「罵声を浴びせた」(A氏) ように「自分も母と同じようになるのではないかという怖さ」を感じ、子どもを持つことに踏み切れずにいた。

結婚する前に精神科医に会い、子どもへの遺伝のリスクを問うた女性もいた。精神科医から遺伝の心配はないだろうと言われても、「ちょっと不安は残ってた」(D氏) というように、「子どもに母の病気が遺伝してしまうのではないかという不安」も抱えていた。

2) 【結婚・出産の決意に至る】

結婚や出産に不安や怖さを抱えていた女性だったが、不安や怖さを乗り越えられる機会に恵まれたり、人生経験を積むことで、【結婚・

出産の決意に至る】ことができた。

女性は、自分の境遇や母親のことを話しても「好意的に捉えてくれた」(B氏)男性や、「変な先入観を持っていなかった」(D氏)男性と出会った。母親のことや、自分が育った家庭のことを受け入れてくれる、「結婚しても大丈夫と思える、安定した人との出会い」が訪れ、結婚の決意に至った。

結婚後は、夫が育ってきた「ケンカがない家庭」(C氏)における「生活の安定」(C氏)を知った。夫は、平和で楽しい家族の中で育ったと知り、衝撃を受けた。「そんな家族あるんや」(A氏)と「夫の家族を通して、自分の知らない温かい家庭を知ることができた」。

ある女性は、色々な家庭に出会い、「自分だけがしんどいんじゃないな」(A氏)と思った。そして、努力することで、自分で困難を乗り越えられた成功体験を重ね、「大変な家庭で育った自分でも、子どもを育てられると思える」ようになった。

3) 【子育てをする上での困難】

結婚して子どもを出産した女性は、【子育てをする上での困難】に直面した。

子育てをするときに、実家に頼りたい気持ちはあっても、実家に頼ることは「一切なかった」(B氏)。子どもを連れて実家に帰っても、母親は子どもの面倒はみずに、「ほったらかしでたばこ吸ってた」(C氏)と語られたように、「母に子育てを手伝ってもらえない」現状があった。

理想的な母親像を持たずに育った女性たちは、「いいお母さんを目指す」(C氏)ようになり、良い母にならなくてはという気負いが、強すぎることであった。また、自身も親にたたかれた経験があるため「たたくってことにあんま抵抗なくて」(C氏)、子どもが、とても悪いことをした時には、「ちゃんとしつけようと気負い、子どもをたたく」ことがあった。

子育てをすると、自分の辛かった幼少期を思い出してしまった。子どものランドセルを見て、「よく母に、姉のランドセルをバーンと投げられたりとか、そういう記憶がフワッと出てきたりとかして、すごいしんどい」(A氏)と語られたように、「子どもの成長とともに過去を思い出してしまう辛さ」を感じていた。

4) 【自分の力で子育てに対処】

女性は、子育てに困難を抱えながらも、人を頼ったり、人に相談することは難しく、【自分の力で子育てに対処】した。

病状が不安定な母親に育てられた女性たちは、「絶対、母親のようににはなりたくない」(D氏)、「母にされて嫌だったことはしない」(A氏)と語られたように、母親を反面教師にしていた。自分の授業参観に母親が、来なかったという経験をもつ女性は、「普通、お母さんが子どもに手振って、子どもも手振るみたいな光景があるじゃないですか。ああいうのはやりたかった。」(C氏)と語った。その経験から、自分は子どもの授業参観に行き、「母を反面教師に、自分がしてほしかった子育てをする」ようにしていた。

女性は、幼少期から「親に相談しても、解決にならなかった」(D氏)という経験を持っていた。「自分の力で考えて、何とかする癖がついてる」(D氏)ため、自分から相談はしなかった。「自分で決めて、考えて、育児もやってきた」(C氏)と一人で対処していた。育児書を「めちゃくちゃ読んだ」(D氏)というように、「人に頼らず、育児書に頼る」子育てをしていた。

5) 【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】

女性は、【自分の力で子育てに対処】していたが、【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】することができるようになった。

母親のように、なりたくないと感じていた女性が、子育ての相談を夫にしたところ、「適当でいいんじゃない？」(D氏)と言われるなど、「夫の気負わない姿勢を見て、気負いすぎずに子育てをする」ように変化した。

実母には頼れなかったが、義母が産後1か月間、毎日ご飯を作りに来てくれたり、「大きくなってきたら子どもが助けてくれるよ」(A氏)と子育ての見通しを教えてくれるなど、「婚家に家事育児を手伝ってもらおう」ことで助けられていた。

他人に相談することが苦手な女性であるが、保健師が『『どうですか』とか、お子さん産まれたら、どなたの家にも支援するから、そういうのであっちから来てくれるっていうのが、結構良かった。』(C氏)と語られたように、「保健師などの支援者に助けられる」経験をしていた。

自分が体調を崩した時に、ママ友が子どもを預かってくれたという女性もいた。「実家の親では

なく、ママ友つながりで乗り越えてきました。」
(B氏) というように「ママ友とのつながりに助けられる」女性もいた。

6) 【子育てを通した癒しと成長】

困難がありながらも女性は【子育てを通した癒しと成長】を経験することになった。

自分が母親にしてもらえなかったことを子どもにすると、「ちゃんと(子どもから反応が)返ってきてるってのが自分をどんどん癒やしてくれて」

(C氏) と語られたように、「子どもが自分に応えてくれて、癒される」ということを経験した。

子育ては「自信を持ってできた」「自分が強くなれた」(B氏) と、「子育てを通して、自分が成長する」ことを実感していた。

7) 【母を理解そして感謝】

自分が実際に子どもを育てることで、初めて同じように自分を育ててくれた【母を理解そして感謝】の気持ちが生まれた。

自分も子育てをしてみると、自分が子どもの頃、帰宅が遅くなると母親が激怒していたことも「むしろ愛情があるから」(D氏) していたことなのか

もしれないと理解した。「当時は、そういうふうには受け取ってはいなかったですけどね。」(D氏) と「当時の母の気持ちを理解できるようになる」という変化があった。

過去を振り返り、「お母さんの子どもで私は良かったなって思ったんですよ」(B氏) というように「母に感謝する気持ちが出る」ようになり、母親との関係における気持ちの変化を感じていた。

IV. 考察

1. 精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験

本研究では、精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験として【結婚・出産に対する不安や怖さ】【結婚・出産の決意に至る】【子育てをする上での困難】【自分の力で子育てに対処】【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】【子育てを通した癒しと成長】【母を理解そして感謝】が抽出された。複数のカテゴリーに関係する、養育環境と遺伝、子育ての相談、自分自身の変化の3点について考察する。

表1 精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験

カテゴリー	サブカテゴリー
結婚・出産に対する不安や怖さ	普通の家庭を知らないまま家庭をもつことの不安
	自分も母と同じようになるのではないかという怖さ 子どもに母の病気が遺伝してしまうのではないかという不安
結婚・出産の決意に至る	結婚しても大丈夫と思える、安定した人との出会い 夫の家族を通して、自分の知らない温かい家庭を知る 大変な家庭で育った自分でも、子どもを育てられると思える
子育てをする上での困難	母に子育てを手伝ってもらえない ちゃんとしつけようと気負い、子どもをたたく 子どもの成長とともに過去を思い出してしまう辛さ
自分の力で子育てに対処	母を反面教師に、自分がしてほしかった子育てをする 人に頼らず、育児書に頼る
婚家や周囲に支えられて子育てに対処	夫の気負わない姿勢を見て、気負いすぎずに子育てをする 婚家に家事育児を手伝ってもらう 保健師などの支援者に助けられる ママ友とのつながりに助けられる
子育てを通した癒しと成長	子どもが自分に応えてくれて、癒される 子育てを通して、自分が成長する
母を理解そして感謝	当時の母の気持ちを理解できるようになる 母への感謝の気持ちが出る

1) 養育環境と遺伝

【結婚・出産に対する不安や怖さ】の категорияでは、「自分も母と同じようになるのではないかという怖さ」〔子どもに母の病気が遺伝してしまうのではないかと不安〕が抽出された。精神障がいを抱えた親をもつ子どもは、自身も精神疾患発症のリスクが高いことが、明らかにになっている¹²⁾。しかし、必ずしも遺伝するわけではないため、不安を軽減するための正しい情報提供や、早期発見・早期治療などの対処法を学ぶ機会が必要だと考える。

【結婚・出産に対する不安や怖さ】や【結婚・出産の決意に至る】の категорияでは、精神障がいを抱える親に育てられた女性は、「普通の家庭」を知らないことを気にしていた。普通ではない家庭を受け入れてくれる夫と出会い、自分が知らない温かい家庭を知り、また、普通ではない家庭で育った自分も、対処できるという自信をもてることで、結婚や出産をしようと決意するに至っていた。この「普通の家庭」を知らないまま育った影響は、【子育てをする上での困難】の categoriaにおいても現れていた。自分の母親のようにはなりたくないという強い気持ちから、しつけようと気負い、子どもをたたいてしまうということも起こっていた。親が精神障がいを抱えている場合に、普通を知らないことが、自信喪失になるということはこれまでの研究でも報告されている⁶⁾。しかし、本研究では、「普通の家庭」を知らないことは、自身の自信喪失にとどまらず、新たに自身が家庭をもつ際や、実際に子育てする際においても、支障をきたし得ることが明らかになった。親が精神障がいを抱える女性は、自身が親になった時に子育てで気負い、苦勞する可能性があると考えられる。

【自分の力で子育てに対処】の categoriaにあるように、女性は自分の母親を反面教師にして、自分なりに育児を行っていた。しかし、【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】の categoriaにあるように、夫の気負わない姿勢に触れることで、楽に子育てができるように変化していた。気負いすぎる傾向がある女性であるがゆえに、気負わずに子育てが、できるようなアプローチが重要になる。完璧な子育てを目指さないほうがよいと支援者や家族が、伝えることが有効だと考えられる。

2) 子育ての相談

【自分の力で子育てに対処】の categoriaでは、実家に頼れない状況であっても、他人にも頼れずに、自分だけで対処する経験が語られた。

精神障がいを抱えた親に育てられた人は、自ら相談することが、苦手であることが多いと言われている^{6,7)}。人に相談することを苦手とするが、

【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】の categoriaにあるように、婚家、保健師などの支援者、ママ友に助けられて、子育てを行ったという経験も語られていた。保健師が、支援を要請しなくても、訪問してくれることを歓迎していた。そのため、支援を要請しなくても保健師などから連絡をして、相談にのるという積極的な支援が有効だと考えられる。また、気軽に話せ、実質的に手伝ってくれるママ友の存在も育児の困難や不安を軽減するために重要だと考えられた。

3) 自分自身の変化

【子育てを通した癒しと成長】【母を理解そして感謝】の categoriaでは、精神障がいを抱えた親をもつ女性が、自身の子育てを通して自分自身の変化を感じていた。特に、【母を理解そして感謝】の categoriaでは、子育てを経験したからこそ、理解できるようになった母親の姿があり、感謝につながっていた。つまり、精神障がいを抱えた親をもつ女性にとって、子育てとは、母親の理解につながり、親子関係の改善に寄与する経験になり得ると言えるだろう。

2. これから必要な支援

本研究の結果を踏まえて、今後の支援について考察する。まず、精神障がいを抱えた親をもつ女性が、相談しやすい仕組みや工夫が必要だと考えられる。鷺山¹³⁾も地域共同体の機能を再構築して、「子どもを抱えて孤立した母親」をつくらないようにしていくことが、虐待予防として有効であると述べている。特に、自ら相談することを苦手とする、精神障がいを抱えた親に育てられた女性にとっては、保健師など支援者からの積極的なアウトリーチによる支援が、重要であると考えられた。生後4か月までの全世帯を訪問する、乳児家庭全戸訪問事業においては、自ら相談することが苦手な人が、いることを念頭に置く必要があるだろう。「困ったときに相談してください」という待ちの姿勢での支援ではなく、定期的に連絡し

たほうがよい家庭もあることを考慮することが望まれる。さらに、気軽に話せるママ友の存在は重要であり、民生委員活動や子育てサロンの開催など、地域で支える体制を強化する必要がある。

次に、結婚・出産への不安や子育ての気負いがあるという、女性自身の問題に自ら向き合う場も必要だと考えられる。結婚前の早い時期に同じ子どもの立場の人とつながり、結婚・育児を経験した人の話を聞くことや、様々な考え方を知ることができれば、精神疾患特有の遺伝などの不安や、健全な家庭で育っていないゆえの育児不安を軽減できると考えられる。精神障がいを抱えた親をもつ子どもの集まりは、全国的にみてもまだわずかであり、また、過去をじっくりと振り返られるプログラムは、ほとんどない。しかし、精神障がい者の家族会の全国組織である全国精神保健福祉会連合会は、家族ピア教育プログラム「家族による家族学習会」¹⁴⁾という体系的なプログラムを組織的に展開している。この「家族による家族学習会」では、子ども版が用意されており、幼少期から恋愛、結婚、育児までのライフステージを通して、同じ子どもの立場の人と一緒に、お互いの経験や考えを共有することができる⁷⁾。精神障がいを抱えた親に育てられた子どもは、結婚前にそのような場に参加し、結婚や育児への不安を解消することが望まれる。

最後に、子どもの頃に辛い思いをしないような支援が必要だと考えられる。精神障がいを抱えた親をもつ女性は、「子どもの成長とともに過去を思い出してしまう辛さ」を語っていた。精神障がいの場合は、病状が不安定になると育児負担も重なり、適切な対応が、できなくなることがある¹⁵⁾。それゆえ、訪問看護等で病状が安定できるような支援や、障害者総合支援法の家事援助サービスを入れて育児負担を軽減することが重要であろう。そのような支援があれば、親から愛情を受けたと感じられる時間も長くなると考えられ、育児への不安も軽減され、また、親との関係性を改善することにもつながると期待できる。

3. 本研究の意義と限界

本研究では、これまでの研究で明らかにされていなかった、精神障がいを抱えた親に育てられた女性が、母親になる経験を記述することができた。その経験から、育児困難を解消する要因や、結婚や育児への不安を解消するための方法について

示唆を得ることができた。

本研究の限界としては、研究協力者が、全員の子どもが集いに参加している人であるため、集いの場を見つけられるようなリテラシーが、高い人という対象特性が挙げられる。4人中3人に精神的に調子を崩した時期があったが、自らも精神疾患を長期にわたって患っていることもないため、比較的健康度の高い人の経験を記述している。また、ママ友との関係を築けていたことから、逆境に曝されたなかで、適応する個人の特性である、レジリエンス¹⁶⁾の高い集団である可能性がある。

さらに、今回は精神障がいを抱えた当事者は、全員母親であったが、父親である場合は、経験も異なってくる可能性がある。子ども時代の困難の違いとしては、当事者が母親である場合の方が、愛着形成により大きな影響を及ぼし、父親の場合、経済的困難がより経験として大きくなってくると考えられる。母親になる経験においては、当事者が父親である場合の方が、母親との関係が築けており、自身が母親になるに当たっての葛藤が小さい可能性があるだろう。

また、精神障がいを抱えた当事者の病状や診断名によっても、女性の経験は変わってくると考えられる。今回、当事者全員の病状が不安定であったと、研究協力者は判断していた。病状が安定していれば、「絶対、母親のようににはなりたくない」

(D氏) というような思いを抱かなかった可能性もある。診断名に関しても、今回は統合失調症・妄想性障害であったが、気分障害やアルコール依存症など他の診断名の場合は、経験が変わってくることが考えられる。気分障害は比較的社会全体の理解も進んできているため、結婚を考えている人やその家族に伝える困難が、統合失調症よりは低いと考えられる。それに伴い、障がいを抱えた親のことを考えて結婚をためらう気持ちも変わってくると考えられる。

V. 結論

精神障がいを抱えた親をもつ女性が母親になる経験について、質的記述的研究によって分析した結果、【結婚・出産に対する不安や怖さ】【結婚・出産の決意に至る】【子育てをする上での困難】【自分の力で子育てに対処】【婚家や周囲に支えられて子育てに対処】【子育てを通じた癒しと成長】【母を理解そして感謝】のカテゴリーを生成した。育児困難を軽減するためには夫・婚家・

ママ友の存在や積極的な支援が重要であり、結婚や育児への不安を解消するためには、結婚前の早い時期に同じ子どもの立場の人と体験を共有することが重要だと考えられた。

謝辞

本研究に協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 JP16K12330 の一部として行われた。本論文は、平成 30 年度大阪大学医学部保健学科看護学専攻特別研究に修正を加えたものである。

利益相反

本研究に開示すべき COI はない。

文献

- 1) 厚生労働統計協会(2018)：国民衛生の動向 厚生
生の指標 増刊, 財団法人 厚生労働統計協会,
東京.
- 2) Leijdesdorff S, van Doesum K, Popma A,
Klaassen R, van Amelsvoort T. (2017) :
Prevalence of psychopathology in children of
parents with mental illness and/or addiction:
an up to date narrative review, *Current
Opinion in Psychiatry*, 30(4) ; 312-317.
- 3) 厚生労働省(2018)：平成 28 年生活のしづらさ
などに関する調査(全国在宅障害児・者等実態
調査) 結果, [https://www.mhlw.go.jp/
toukei/list/dl/seikatsu_chousa_c_h28.pdf]
(検索日：2019 年 10 月 31 日)
- 4) 森田久美子(2013)：精神障害の親を介護する
子どもに関する研究の動向と展望, 立正大学
社会福祉研究所年報, 15, 89-106.
- 5) 長江美代子, 土田幸子(2013)：精神障がい
の親と暮らす子どもの日常生活と成長発達への影
響, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8(1) ; 83-96.
- 6) 田野中恭子(2019)：精神疾患の親をもつ
子どもの困難, 日本公衆衛生看護学会誌, 8 (2), 23-32.
- 7) 横山恵子, 蔭山正子(2017)：精神障
がいのある親に育てられた子どもの語り 困難の理解と
リカバリーへの支援, 明石書店, 東京.
- 8) Gladstone B, Boydell K, Seeman M, MacKeever
P. (2011): Children' s experiences of parental
mental illness: a literature review, *Early
Intervention in Psychiatry*, 5, 271-289. Doi:
10.1111/j.1751-7893.2011.00287.x
- 9) 蔭山正子(2018)：メンタルヘルス不調のある
親への育児支援 保健福祉専門職の支援技術
と当事者・家族の語りに学ぶ, 明石書店, 東京.
- 10) グレグ美鈴 (2007)：主な質的研究と研究
手法, グレグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江,
よくわかる質的研究の進め方・まとめ方第 2 版
看護研究のエキスパートをめざして. 54-72,
医歯薬出版, 東京.
- 11) 佐藤郁哉 (2008)：質的データ分析法－原理・
方法・実践. 新曜社, 東京.
- 12) Rasic D, Hajek T, Alda M, Uher R. (2014) :
Risk of mental illness in offspring of
parents with schizophrenia, bipolar
disorder, and major depressive: a meta-
analysis of family high-risk studies,
Schizophrenia Bulletin, 40(1) ; 28-38.
- 13) 鷺山拓男(2012)：子どもの虐待と母子・精神
保健 虐待問題にとりくむ人のための「覚え書
き」〔改訂版〕. 萌文社, 東京.
- 14) 横山恵子(2018)：特集 子どもの立場からみ
えること, 月刊みんなねっと 2018 年 5 月号,
全国精神保健福祉会連合会, 5-13.
- 15) 蔭山正子, 田口敦子(2013)：精神障がいをも
つ母親への保健師による育児支援技術－病状
と育児のバランスを図る, 日本地域看護学会
誌, 16(2), 47-54.
- 16) 太田美里, 岡本祐子 (2017)：レジリエンスに関
する研究の動向と展望－環境要因と意味づけへの
着目－, 広島大学心理学研究, 17, 15-24.